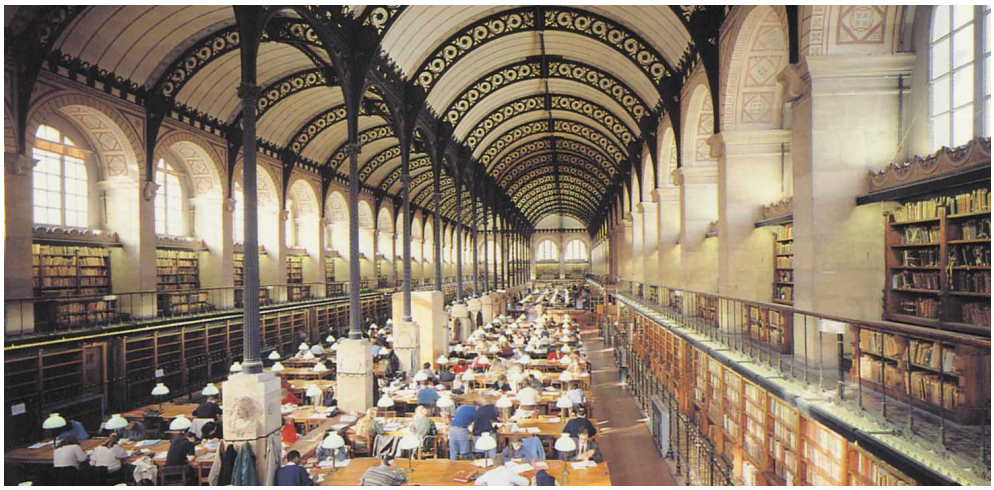
第34号　(2005.7)

Library Mate

パリの図書館スケッチ　－右岸と左岸－

CNRS名誉研究員　ドベルグ美那子



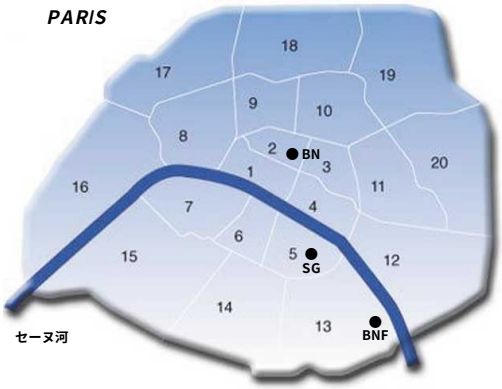
パリで学究生活に入ってから知らぬ間に歳月が流れた。その間訪れた図書館や古文書館はフランスを始め、東欧を含むヨーロッパ各地、いわゆる“旧大陸”とイギリス、アイルランドにわたっている。専門が日欧交渉史であるから当然かもしれない。しかし古くからのお馴染みはやはりパリの図書館といえよう。中でもフランス国立図書館(以下、BNという)と聖ジュヌヴィエーヴ図書館(以下、SGという)は、サン・ミッシェル通りの国際女子寮時代から通い始め今日に至っている旧知の仲で愛着も深い。

ところで前者は日本でも知名度が高いが、後者は一部の研究者を除いて余り知られていないようだ。首都における知識の宝庫としての重要性で両者は双璧をなし、対照的でありながら共通点もあり、過去には深いつながりがあった。

そこでこの二つの図書館についてご紹介したいと思う。パリを東から西に流れるセーヌ河をはさんで一つは右岸に、一つは左岸に位置し、互いにその威容を誇り競い合っている。伝統的に右岸は貴族的、官僚的、保守的、左岸は庶民的、開放的、進歩的といわれてきたが、それはこの両図書館についてもある程度当てはまるようだ。つまりBNはもと王宮だったルーブル美術館に近いリシュリュー通りに(もっとも1994年以後刊本はすべて左岸

＜写真：聖ジュヌヴィエーヴ図書館＞

トルビァックの新館に移管されたが)、SGの方はパンテオン(フランス国家功労者たちの霊廟)やパリ大学法学部に隣り合い、ソルボンヌや各種有名校のあるカルチェ・ラタンと呼ばれる大学区域にある。前者は閲覧が原則として学者、研究者、専門家に限られ、入館カードは有料でアカデミックカラーが濃いのに対し、後者はすべての人、特に学生たちに門戸が開かれ入館は無料でリベラルカラーが強い。この相違はそれぞれが経てきた過去の歴史とも切り離せないようだ。



それでは両者の歴史をざっと展望してみよう。まず右岸のBNから始めることにする。この図書館は歴代フランス王室と深い関わりをもっている。1368年ヴァロア朝のシャルル５世はルーブル王宮内の“ 鷹舎の塔 ”を書斎とし、自ら集めた917部の写本を架蔵した。このプライベート・コレクションを母体として更に継続発展させ、図書館の体裁に整えたのはルイ11世である。続いてシャルル８世、ルイ12世はイタリア遠征の時持ち帰ったかの地の写本やインキュナビュラ(初期の刊本)などの貴重本をこれに加えた。これらは、ロワール河のお城として有名なアンボワーズ、ついでブロワに移され、フランソワ１世がフォンテンブローに設けた新しい書籍コレクションと合併されて一大蔵書となった。王は1538年12月28日に勅令を発し、爾後出版業者、販売店は王国内で発売される書籍を“ 王の図書館 ”に納入するよう義務づけたのである。この納本制度によって、王室の蔵書数は飛躍的に伸びた。現在わが国の国立国会図書館でもこの制度が行われているようだが、その先鞭をつけたのが16世紀のフランス王であったことを御存知の方は案外少ないのではないだろうか。余談になるが、彼はイタリア出兵の時“ 名誉ある捕虜 ”となり、保釈金でやっと帰国した。国民にとっては“ 高くついた王様 ”だったが、レオナルド・ダ・ヴィンチを自分の城に招き、その死の床を見舞ったり、イタリアの高い文化－出版物を含む－にあこがれ自国に導入した文明開化のリーダーでもあった。

次のブルボン王朝時代にも王家の蔵書は増えていった。領土も外交関係も拡大し、外国使節からの贈り物の中には豪華本や稀覯書があった。遠く清朝の康熙帝から贈られて来た書籍類は19世紀フランスの東洋学研究者誕生と無関係ではない。

1666年は王室蔵書にとって画期的な年となった。太陽王ルイ14世の親政による絶対王権が確立し、辣腕の政治家コルベールの指揮で本格的な図書館が発足したのである。先ず現在のBNの裏手にあたるヴィヴィアンヌ通りの２つの建物がそれに当てられた。蔵書が増えるにつれ、これを整え管理する司書が必要となる。1670年ニコラ・クレマンが初代王室司書に任命された。彼は刊本を分類し、その分類法は1997年まで遵奉された。写本の方は言語別、主題別に分類され、1719年に司書となったジャンポール・ビニョン師が担当した。この頃刊本、写本、メダイ(編集註：メダルのこと)、版画の各部門が誕生した。後に刊本部から地図部が独立し、音楽部が加えられ今日に及んでいる。ビニョンは図書購入にも力を注いだ。彼の念頭にあったのは、この王専用の図書館を学者や一般人も利用できるようにすることだった。既に17世紀末左岸のSGは学者へ門戸を開いていたのである。

やがて1789年の大革命となる。この歴史的大事件は図書館にどのように作用しただろうか？勿論旧体制(アンシャンレジーム、王政)は否定され、王命による納本制度は一時廃止された。しかし図書館そのものは国立と名を変えただけで存続し、その上革命政府の没収した旧王候貴族や亡命貴族、教会関係者の財産や書籍コレクション(総数：刊本25万冊、写本１万４千部、版画８万５千点)が新たに入館したのである。自由・平等・博愛の原則により図書館はすべての人に開放された。

その後慌しく政変をくり返し、ナポレオン・ボナパルトが登場し1804年帝位に就くと帝国図書館と改名する。この時代王冠を戴いた鷲の蔵書印が用いられた。王政復古、共和制を経てボナパルトの甥ナポレオン三世の第二帝政時代に入る。図書館は今や厖大にふくれ上がった蔵書の収蔵庫や閲覧室の場所不足が深刻化し、大規模な改築と再編成が必要となった。このため1858年にはプロスペール・メリメ(「カルメン」や「コロンバ」の著者)を中心とする委員会が作られた。建物の改築を依頼されたのは建築家アンリ・ラブルストだった。彼は８年前SGの新館建造を終えている。そこで試みた鉄の素材をここでも用いている。多分注意深い閲覧者はこの二つの図書館の広大な刊本閲覧室がどこか似ているのに気づかれるであろう。

第二帝政も終わりに近い1862年幕府は第一回遣欧使節団をパリに送った。彼らは図書館を訪れ驚嘆している。最初の日本人訪問者である。その後1867年まで幕府派遣の使節団は図書館訪問を慣例とするようになった。皇帝宛献上品の中には、伊能忠敬原図による開成所版の「官板実測日本全図」４巻もあった。現在地図部に収められている。ナポレオン失脚後共和国となり、大革命後大幅に遅れていたカタログ作りが再開される。『国立図書館蔵書刊本総目録』を担当したレオポルト・ドリールは1874年からこの大事業に着手し、31年かかって1905年に完成させた。今日もこのカタログは利用者の必須手引きとなっている。

20世紀末の1988年、当時大統領だったフランソワ・ミッテランは、再び問題化してきた蔵書数および利用者の増加と収蔵庫および閲覧室不足の解決策として、新館建設と蔵書の一部移転プランを提唱した。それまでBNの名で親しまれてきたパリ国立図書館は、1994年１月４日フランス国立図書館（BNF）と改名してスタートする。以後蔵書は二分された。即ちリシュリュー通りの旧館には写本とメダイ、地図、版画部がそのまま残り、13区のセーヌ寄りの地に建てられた新館には刊本と定期刊行物すべてが移転した。後者が公開されたのはそれから３年後で、本式に機能するまでには暫く時間がかかった。コンピュータ・システムが導入され検索が便利になったのは他の近代図書館と同じである。文化活動も盛んでテーマ別の展示会、講演会も行われまさに国際的文化の都市パリにふさわしいマンモス図書館といえよう。

さて次に左岸のSGに目を転じてみよう。毎朝開館前から学生たちが長い行列を作るこの公共図書館は大学総合図書館でもあり、聖ジュヌヴィエーヴの名を冠している。彼女は５世紀半ばセーヌに迫った匈奴（フン族）からパリを救った聖女で、パリの保護聖人として今日も尚市民から篤く崇敬されている。図書館の起源は６世紀に遡る。キリスト教に帰依した最初のフランス王、クロヴィスは左岸パリの高台にバジリカ教会を建て聖ペテロと聖パウロに奉献した。王家の墓にあてられた地下聖堂に聖ジュヌヴィエーヴが埋葬されたのは512年のことである。聖遺物崇拝が盛んになると、当初の二聖人の名は忘れられ、ジュヌヴィエーヴの名のみ残り、教会の通称となった。６世紀末には教会を核に修道院が作られ付随の初歩的図書館も聖女の名で呼ばれた。これがそもそもの始まりである。その後の波乱に富んだ歴史の中で、図書館は伝統的にこの名を保持してきた。つまり創立の時から宗教界と関わりを持っていたのである。14世紀半ば王個人の蔵書に端を発するBNより遥かに古い。王家の保護と寄進により、僧院は大きな財産と勢力を持つようになったが、その後に続く世紀には外冦を受けて略奪され、教会は灰塵に帰した。1177年に修道院と教会は再建され、13世紀には改革が行われ再び敬虔な気風が戻ってくる。院長を中心に修道士たちは規律による共同生活を送った。中世の僧院がそうであるように、ここの修道士たちも祈りの他に聖書の書写に従事した。その中には美しい細密画入りのものや教会で用いる交唱聖歌の楽譜もあった。この活動は18世紀まで続き、写本は貴重書としてSGに今日も保管されている。日本でも僧院で写経が行われ、絵入り表紙の経典が作られたのと相通じるところがある。

恐らく僧院内には早くから小規模の「学校」があったと思われる。12世紀にはアベラールのような弁舌にすぐれた神学者や学僧たちが教会内外で活躍し、人々の注目を集めていた。この気運に乗じて僧院は対外進出を試みる。目指すところはパリ大学神学部だった。聖ジュヌヴィエーヴの修道院長は大学で学業を監督し、講義や称号授与の権能を掌握し、大革命前夜まで大きな勢力を振った。知識欲に燃えた学者や学生たちは左岸に集まってきた。このようにして今日でも学問の中心地区として親しまれているカルチェ・ラタンが形成されていく。1257年、ロベール・ド・ソルボンは貧しい神学生を対象とした建物を提供した。現在のソルボンヌである。

需要の増加に伴い、図書館には神学、法学、自由教養課目の書籍を管理し、利用者のオリエンテーションをする一人の専門司書が必要となってくる。不幸にして16世紀の宗教界の腐敗や宗教戦争は政治的紛争と絡み合い、余波は僧院内に及んだ。図書館の機能は麻痺し、貴重書ははかり売りされ、修道院長はそれを禁止するどころか許可さえ与えたのである。こうして蔵書は四散してしまった。

（次号・後編につづく）

ドベルグ美那子氏　略歴

1954年	実践女子大学国文学科卒業
1971年	フランス国立学術研究所（CNRS）入所
1975年	1975～1994年の間にクレルモン・フェラン大学、パリ大学、ルーバン大学（ベルギー）で16～17世紀の歴史を教える
1994年	パリで国際学会を開催
1997年	定年退職、現在名誉研究員

専攻：日欧交渉史

＜写真：左からパリ大学法学部、聖ジュヌヴィエーヴ図書館、パンテオン＞

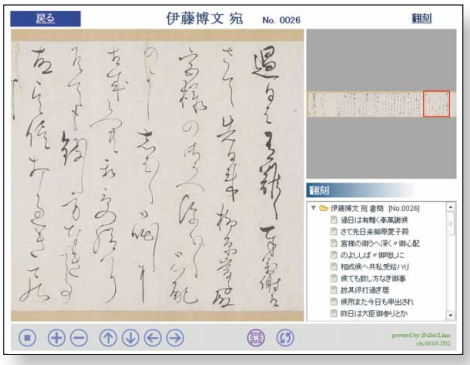
下田歌子自筆書簡を電子化
～ＷＥＢ上に公開　～

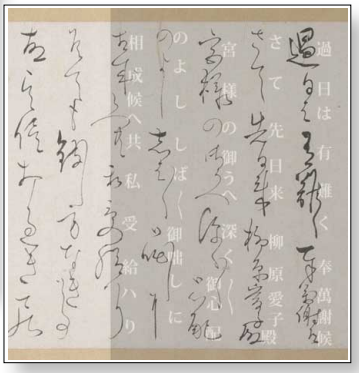
平成17年３月下田歌子生誕150年事業の一環として、本学が所蔵する下田歌子自筆の差出書簡のうち96点を電子化し図書館ホームページ「下田歌子電子図書館」にて公開しました。これら電子化した書簡は、ひじょうに高精細な画像ファイルとなっており、必要な部分を自由に拡大・縮小して閲覧することができます。

そのうち、夫の下田猛夫宛や伊藤博文宛などの書簡11点には本文の画像に翻刻した活字を重ねて読むことができる機能（ガラスビュー）がついています。今後も下田歌子差出書簡には翻刻文を順次追加していく計画です。

また下田歌子宛の書簡も約240点ありますのでこれらの電子化も継続事業として進めていく予定です。

URL　http://www.jissen.ac.jp/library/shimoda/shokan/





太田光 in 向田邦子文庫　－ TV 番組撮影報告－

爆笑問題の太田光氏といえばレギュラー番組週７本の超人気者。毒舌に近い鋭いセリフをウリにしながらも不思議に後味が悪くない。その太田氏がなんと我らが向田邦子さんを敬愛されているという。その上、NHK教育テレビで連続４回、向田作品へのこだわりを語るという。三者の意外な組み合わせに驚き、ワクワクしてくる。

撮影は4/28と5/1。プロデューサー、カメラマン、マネージャー諸氏が総勢10名ほどでやって来た。向田文庫の中は撮影向きにレイアウトを変え、著作を美しく並べた書架の前にスーツ姿の氏が立ち、向田作品の魅力について身振りも豊かに熱く語ってゆく。目映い照明に、文庫のある一角が館内に浮き上がり、多くの学生が注目している。もれ聞こえてくる氏の言葉から、さすがと思わせる人と作品への深い洞察が感じられる。何しろ教育テレビである、きっと楽しくためになるに違いない。

裏方の一見無骨なカメラマン、プロデューサーのおじさん方の繊細・丹念で行き届いた職人仕事ぶりもまた素晴らしい。

そしてOAの日。「阿修羅のごとく」の名場面を分析していく太田氏の眼力と感性に脱帽であった。 向田作品と向田邦子の凄さがよく伝わってくる。やはり向田文庫は実践の宝物である。

番組名：NHK教育テレビ
**　知るを楽しむ　私のこだわり人物伝「向田邦子」**
放送日：2005年６月　毎週火曜日
**　　午後10時25分～10時50分**
**　　テキスト発売　680円**

学術(論文)情報の入手がより便利に

NII（国立情報学研究所）の新サービス紹介

GeNii 学術コンテンツ・ポータル
［ジーニィ］

URL http://ge.nii.ac.jp/
※学外からもアクセス可能

2005 年度４月、国立情報学研究所が提供するポータルサイト「GeNii（ジーニィ）」が正式公開されました。GeNiiでは、国内の論文情報や図書情報が提供されています。場合によっては論文の全文を入手もでき、レポート・卒論の作成等にも非常に便利なサイトとなるでしょう。

※GeNiiは一般公開されていますので、自宅の PC からでも利用できます。ただし、一部有料のものは学園内の端末からの利用になります。
※旧来のデータベース「NACSIS-IR」は「GeNii」に統合されました

GeNii では複数のデータベースを一括して検索できます。

主要なデータベースが４つあり、それらをまとめて検索することも可能です。また関連する項目には相互にリンクが貼られています。

例えば、論文情報を探すとともに、その論文が掲載されている雑誌の情報・所蔵機関などもわかります。

論文全文を入手可能（一部）

※全文コンテンツは「CiNii」で利用できます。

裏へ

GeNii で検索できるデータベース

[サイニイ]

CiNii（NII 論文情報ナビゲータ）

日本の学術論文を中心にした論文情報を提供しています。文献の引用関係（その文献が引用している文献，その文献を引用している文献）を表示することが出来ます。また一部のものは本文へリンクし、論文をその場で 入手することが可能です。 国内の主要学術論文を収録している国立国会図書館作成「雑誌記事索引」もCiNiiに含まれています。

※学園内で接続すると、画面左に「ログイン」ボタンがでますが、通常はログインする必要はありません。

※抄録や引用情報の参照、一部の本文情報等の有料コンテンツは、学園内の端末から利用可能です。

[ウェブキャット プラス]

WebcatPlus（NII 図書情報ナビゲータ）

テーマに関連する情報を即座に探し出す「連想検索機能」で、自分の関心に適した図書を見つけることができます。また、目次や、帯・カバーなどに書かれた内容の情報を見ること（198 6 年以降発行分）や、図書を所蔵している大学図書館などの情報を知ることもできます。

KAKEN（科学研究費成果公開サービス）

文部科学省及び日本学術振興会が交付する科学研究費補助金により行われた研究に関して、当初採択時のデータ（採択課題）と研究成果の概要（研究実績報告、研究成果概要）を収録しています。

NII-DBR（学術研究データベース・リポジトリ）

学術機関（学会等）や研究者が作成した、各分野の専門的なデータベースを検索できます。「博士論文書誌データベース」「家政学文献索引データベース」「経済学文献索引データベース」「社会学文献情報データベース」「文化財科学文献データベース」などが検索可能。一括検索もできます。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

JSTOR（Journal Storage : The Scholary Jouranal Archive）

電子ジャーナル導入

大学図書館では、人文社会科学系の外国雑誌約200タイトルを閲覧可能な電子ジャーナル「JSTOR」を導入しました。下記URLで利用できます。

※JSTORは学内からのみ閲覧可能です。

URL http://www.jstor.org/

※学内からのみアクセス可能

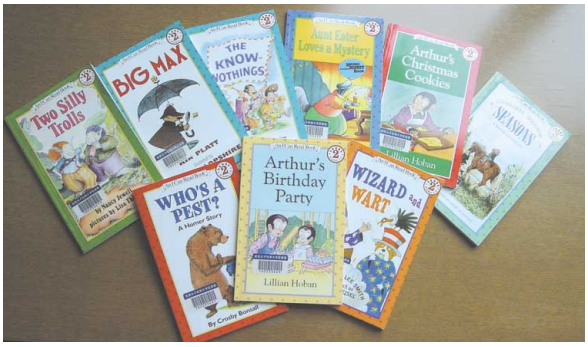
閲覧可能タイトル（一部）

「Art Bulletin」「Art Journal」「Journal of Law and Economics」「Marketing Science」「American Journal of Education」「Child Development」「English Journal」「Language」「Law & Society Review」ほか

my book

多読のすすめ

短大　英語コミュニケーション学科　助教授　三　田　　薫



学生の皆さんに易しい英語の本をたくさん読んで英語力をアップさせる多読をお薦めしたいと思います。多読については多くの研究者がその効果を認めてきました。1980年代以降の英語教育界に大きな衝撃を与えたクラシェンは言語習得のための最も良い方法として多読を推奨し、また語彙研究の権威ネイションも多読による語彙習得の効果を実証しています。しかし日本で広まるようになったのはつい最近で、その火付け役が電気通信大学の酒井邦秀先生です。先生は多読３原則を掲げています。

１．辞書は引かない
（引かなくてもわかる本を読む）
２．分からないところは飛ばして前へ進む
（わかっているところをつなげて読む）
３．つまらなくなったら止める
（楽しく読めない本は読まない）

この方式に従うと平易な本を大量に読みながらゆっくりレベルアップしていくため、結果的には初めから難易度の高い本を読む場合の100倍、1000倍の英文に触れることになり、文法と練習問題だけの学習では得られないバランスの良い英語力が身に付きます。

現在多読を取り入れた授業が全国の中学、高校で始まっています。有名私立中学でも導入されたとか、多読を行ったある都立高校が統一テストで同じ地域の名門高校の成績を超えたといったニュースも聞こえてきます。最近は大学でも続々と多読授業がスタートし、そのセミナーや報告会は満員となる盛況ぶりです。また学校英語に挫折した大人たちも「タドキスト」としてレベル１からスタートし、100万語読破を達成しています。児童英語教育の世界においても、歌とゲームだけの教授法に限界を感じた教師たちが読み聞かせなどで多読用絵本を用いるようになりました。

多読授業でまず苦労するのが蔵書確保ですが、幸運なことに短期大学では、図書館員の方々の多大なご協力のおかげで、約2000冊の本が瞬く間に図書館に揃いました。今年度からは英語コミュニケーション学科の一部の授業で多読が行われています。私の担当授業は図書館内で実施され、学生はその場で貸し出し返却の手続きが受けられます。長文の苦手意識が強く落ち着きのなかった学生も徐々にストーリーに引き込まれ、見学に来られた先生に「おしゃべりしていると思ったら本の内容についてだった。」と言われるほど、情報交換し競い合って読んでいます。各本の総語数はインターネット上でISBNやタイトルから調べることができ、学生たちはそれを「読書記録手帳」に記録していきます。多読授業１ヶ月目に発表会が開かれ、お気に入りの本を披露し合い、「楽しい」「おもしろい」「絵がかわいらしい」「英語の本が最後まで読めて感動した」「読むスピードが上がった」「英文に抵抗がなくなった」という感想が出されました。ゴールデンウィーク中もすすんで読んだ学生、ペーパーバックを自分で購入した学生もいます。どんなに短い本にもそこに１つの「世界」があり、学生はあまり英語を勉強しているという意識を持たずに、その世界をエンジョイしているようです。そしてかくいう私も、目下多読にはまっています。多読用図書は実践の学生であれば誰でも利用できますので、所属や専門を問わず積極的に本を借りて「英語の本が読破できる」感動を味わっていただきたいと思います。

近隣図書館紹介 ～第４回 国立国語研究所図書館

皆さんは「インフォームドコンセント」や「グローバル」といった外来語の日本語言い換えが検討されている新聞記事やテレビ報道を覚えているだろうか。報道では、上記２語をそれぞれ「納得診療」や「地球規模」と言い換えていたが、その検討を行っているのは、1948年に設立された国語に関する研究機関である「国立国語研究所」である。その研究所が今年２月、北区西が丘から立川市緑町に移転してきたのでお邪魔することにした。

「国立国語研究所図書館」は、日本で唯一の日本語に関する専門図書館で、現代日本語についての研究文献や言語資料を中心に、日本語学、言語学、日本語教育、及び関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

取材当日、最初にびっくりさせられたのは同研究所の総ガラス張りの外観である。当然ながら図書館も総ガラス張りなのだが、２階と３階は吹き抜けとなっており、採光の良い大きな窓、白と半透明を基調とした棚等の什器類に目を見張った。

旧図書館と比較すると、面積は約1.5倍になったとのことで、座席数が８席から60席に増加し、ＡＶ視聴用ブースやパソコン専用デスクも備えつけられた。資料は独自の分類で配架されており、２階閲覧室はカウンター側から近年発行の洋雑誌、和雑誌、学術紀要類、辞書類、国立国語研究所刊行物の順に並んでいる。

普段は職員しか入庫できない１階にある閉架書庫（和・洋図書、雑誌バックナンバー、国語教科書、貴重書、マイクロ資料など）を見せてもらった。この１階は２階の固定書架とは異なり、電動書架の書庫になっている。

書架を眺めていると、都道府県別言語資料が目に付いた。北は北海道から南は沖縄まで、それぞれの方言関係の資料が並んでおり、一日いても飽きないのではないか、と思った。また、著名な学者と学会（方言学者の東条操と大田栄太郎、国語学者の保科孝一、国語辞典編者の見坊豪紀、カナモジカイ）から寄贈された資料はここに混配されている。

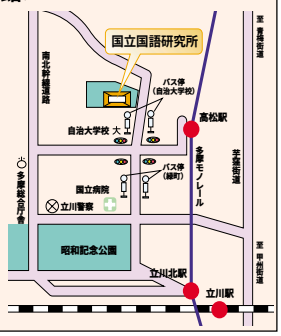
同研究所には方言関係の質問が多く寄せられるという。松本清張の小説『砂の器』では、主人公が国立国語研究所で方言の分布図を見せてもらったことから事件を解明するシーンがあるが、地方の方言や俚言は同研究所が作成した全国方言談話データベース（CD―ROM、CD）や方言談話資料（カセットテープ）で実際に聴くことができる。

図書館２階の一角では、研究員によって同研究所編集の『国語年鑑』『日本語教育年鑑』に掲載される論文の採録作業が行われていた。また、情報システム室では書誌データの入力作業が行われていた。そのデータベースを利用している当館にとってはこのような地道な努力に感謝するほかない。

同館は誰でも利用できる。言語や国語に興味のある方、同図書館の資料を使いたい、という方は当館にまずご相談下さい。但し、館外貸出は行われないのでご注意下さい。

＜国立国語研究所図書館＞

蔵書：和書 8.4 万冊
　　洋書 1.7 万冊
　　和雑誌 3.7 千種
　　洋雑誌 370 種
〒190-8561
立川市緑町 3591-2
TEL : 042-540-4640
URL: www.kokken.go.jp/syokai/tosyo/
蔵書検索あり



Library Mail

講談社英語文庫の紹介

短大図書館の新書・文庫コーナー（閲覧席の奥）に、新しく英語で読む文庫―「講談社英語文庫」（講談社インターナショナル）が入りました。この文庫は、英語の初級から上級まで、さまざまなレベルに対応できるように作品を集めています。短大図書館では英語の初級から中級程度の作品を選び、現在99冊所蔵しています。

昔話、神話、マザーグース、ピーター・パン、赤毛のアン、吾輩は猫である、ポアロの事件簿など、ジャンルも幅広く、日本だけではなく海外の古典や児童文学、小説などの作品があります。なるべく辞書を使わないですむように、巻末にNotes（語句の解説）が付いています。

短大図書館では、今年から多読テキストを購入し、授業で使用していることもあり、英語文庫を読む学生が増えてきました。最もよく読まれているのは、“Sazae-san”（対訳　サザエさん）です。

そのほか、“Finn　Family　Moomintroll”（たのしいムーミン一家）などの児童文学作品も読まれています。英語に興味のある方は、ぜひ一度手にとってみてください。

『源氏物語展』報告

主催：中古文学会・実践女子大学文芸資料研究所・実践女子大学図書館
期間：平成17年５月12日～５月27日
場所：実践女子学園香雪記念資料館（協力）

この展示は、５月13～15日にかけて行われた中古文学会開催に合わせて企画された。下田歌子生誕150周年記念事業の一貫として、学祖生誕の地岐阜県恵那市岩村町で本年２月に開催された展示内容と基軸を同じくするが、より専門性を高めた展示となった。

今回、出展された資料は、貴重な善本を揃えている。重要文化財『拾遺和歌集（寂恵本）』。東北大学蔵の国宝『史記孝文本紀第十』とほぼ同年代の平安期写『史記孝景本紀第十一』。天下の孤本ともいうべき『雫に濁る物語』。源氏関係の写本では、岩波文庫本等の底本『紫式部集』。『源氏物語』の写本では、最良本とされる大島本に勝るとも劣らないという明融本、鎌倉時代書写といわれる伝為相筆本、さらに室町期古活字版（第一種）、江戸期の版本や浮世絵（源氏絵）も展示され、源氏物語が世に広がる様子が見えるようだ。極彩色の絵巻『住吉物語』や奈良絵本『おちくぼ』『さごろも』『栄華物語』も豪華な彩りを添えた。

いんふぉーめーしょん

2005年７月～2005年11月

大学図書館

開館時間

通　常：月～金　8:50 ～ 19:30
　　土　　8:50 ～ 16:00
試験期（７/1 ～７/29）
　　月～金　8:50 ～ 19:30
　　土　　8:50 ～ 18:00
夏休み期間（７/30 ～９/20）
　　月～金　9:00 ～ 16:00　※土曜閉館

休館日

書庫整理日：9/27、10/25、11/29
夏休み期間：毎週土曜日、8/10(水)～8/18(木)

試験期の貸出

7/1(金) ～ 7/23(土)　　3日間貸出

夏休み特別貸出

期　間：7/25(月) ～ 9/12(月)
冊　数：無制限
返却日：9/26(月)

卒論作成者のための特別貸出

対　　象：博士論文・修士論文作成者
　　卒業論文作成者(全ての学科)
受付期間：10/１(土) ～ 11/10(木)
貸出期間：貸出日から30日間
冊　　数：無制限

※卒論・修論特別貸出対象資料は、大学図書館の図書のみです。
※指定図書・雑誌は通常貸出です。

短期大学図書館

開館時間

通　常：月～金　9:00 ～ 18:15
　　土　　9:00 ～ 16:00
夏休み期間（７/30 ～９/20）
　　月～金　9:00 ～ 16:00　※土曜閉館

休館日

書庫整理日：10/5、11/９
夏休み期間：毎週土曜日
　　8/３(水)～8/31(水)は、夏期休業及び蔵書点検のため休館。

試験期の貸出

7/1(金) ～ 7/23(土)　　3日間貸出
対　象：大学生、短大生

夏休み特別貸出

図　　書　冊数：無制限
　　期間：7/25(月) ～ 9/12(月)
ＡＶ資料　冊数：6点
　　期間：7/25(月) ～ 9/16(金)
指定図書　冊数：3冊
　　期間：7/25(月) ～ 9/22(木)
返却日：9/26(月)

※雑誌は通常貸出です。

○常磐祭のため11／11(金)～14(月) は閉館。
○詳細や変更は掲示にてお知らせします。

編集後記

図書館では４月より正式に開館延長を行っています。大学は平日19:30、短大は18:15まで開館しています。どうぞご利用下さい。

さて、本学卒業生ドベルグ美那子さんの「パリの図書館スケッチ」はいかがでしたか。

後編は17世紀以降の図書館復興編です。次号(35号) をお楽しみに。

Library Mate　第34号　2005年７月

発行所　実践女子大学図書館
東京都日野市大坂上４－１－１
URL:http://www.jissen.ac.jp/library/
実践女子短期大学図書館
東京都日野市神明１－１３－１
URL:http://www.jissen.ac.jp/library/jcol/

発行責任者　日浅和枝